



馬琴
 乾夷巡遊記
 初編一

春

庫書館
 59
 6
 184
 40
 號番
 數冊

~ 13
 3093
 1



13
3993
1-40

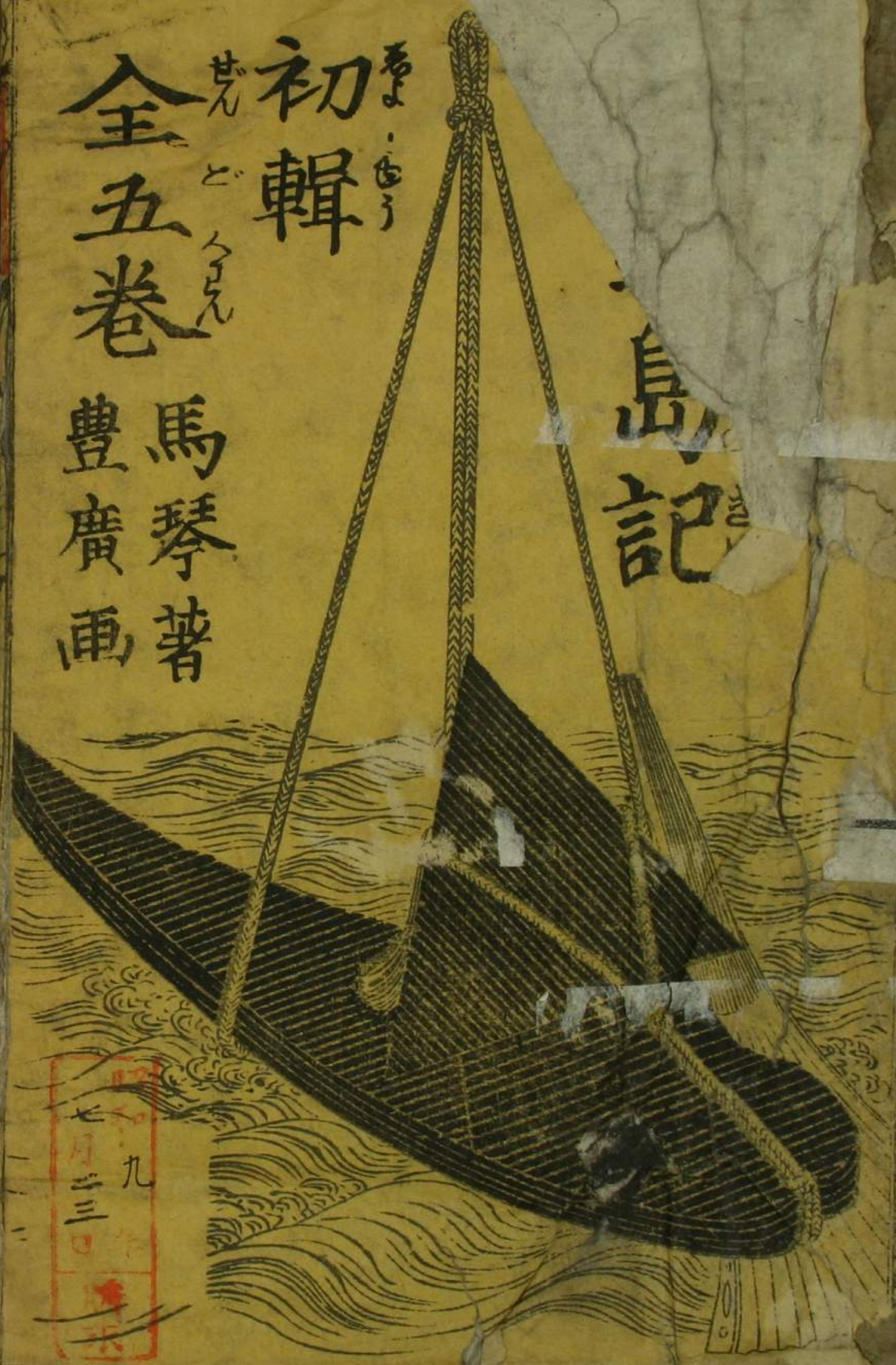
和田田

和田田

此編最就於倉卒之際及命工繡梓未有自
 序也而書賈又巧之誅求如債將綴數行以
 塞其責方是之時毛穎氏致仕楮先生離散
 召之未至卒然搜破麓不意獲墨本一頁素
 吾藏奔之物平義秀尺牘也雖其書非肉筆
 歷歷由來存焉既已忘有是書今不求而出
 猶如有神知吾可用可謂奇矣即影寫之以
 代序辭聊又陳其事書右端趙再白嘗有詩
 曰名士本來如畫餅古人原不好真龍併劍
 之使閱者知愚意
 文化甲戌冬至除夜 叢笠東人解撰

初輯
 全五卷
 馬琴著
 豐廣雨

島記



九月三日

門八 13
號 3093
卷 五 14

朝夷三郎義秀尺牘

去冬粒方年

方以紅款

年方所記

云

百義齊

公蘭

朝夷三郎義秀尺牘

卷五

朝夷巡嶋記全傳初輯總目錄

第一條

栗津原六出

鎌倉山鼠麴

第二條

月夜竊立鳥

鷄鳴野嶋船

第三條

遠山寺兒櫻

山脚村教草

第四條

濱驛館蒲黃

修善寺奔湯

第五條

絲奈幡太薄

促死秋蟄居

第六條

截落刀野糸

返汝湯嶋檜

第七條

林坂牛奔車

榎虛崑山佛

第八條

歸郷野邊送

復讐記念刀

第九條

朝靄庄司暖

夕立許我郷

第十條

在旅宿元服

大石山遺弓

通計一十條一帙五卷初輯目錄終

朝夷三郎平朝臣義秀

英聲 懷絶 城 勇敢 鎮 窮



心もろく

きりあふ

心もろ

心もろ

心もろ

あま

あま

あま

著作



文乃
まろく
あまの
かまろく
人の
まろく
福は

源範頼朝臣



三三
廣光



奮勇
全遺
走腹

勇婦繪

源範頼朝臣



侍魁 桜枝

龜子 花井

吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦
 吉見冠者義邦

吉見冠者義邦



處女 友崎

山の主 魔平太

庵丁乃子也
 山の舞の袖を
 いとさへせん
 いさえなり魚

下のやれのむら
 氷より紙のけり
 きてふとくくた
 らんそれ月

駿河前司源廣綱

目見概



又凡乃
 方に乃
 他より
 人あり
 せり
 のと
 なる
 まり



刀野大船晴夏

草子社糸巻

○卷端半旨の餘帝ありて營生要法の旨と録して恭しく四方君子小告あるを左の如し

家傳神女湯 一包百銅 この此者か家は良方婦人諸病の神薬にして産前産後ちのこいふ

即功ありきはふより相傳五世小おびて家小難産天折の婦人あること此功あり

用ひ給うつそとつとつと紙とあるらち多死比ひのやまゆくその功拔群自餘乃

賣劑ふすささるるやう小く求むる君子必しいと熟し然しとふらん

つ死虫の妙茶 一包百銅 半包三十二回婦人毎月つたや小うり多死つたひ

いりらる小用ひくまめへ又産後小ありたふりあはるあはまて月やや夜切

精制衣奇應丸 查三百粒 余入代計朱中色三千六 入代五 赤小 包十 代赤 但考す下

世小まご丸まるといふも製法の難しきや一由小極品をえりまざる奇應丸の名

ありしはまき丸の功のうほはる製法とるところ産後のおこいといふとれ量とて

はふとてひ制法はむつまあり是と下の奇應丸よりたれはその功百倍万倍

諸病外ははと三療治毎月七日 廿七日 是とて三日ありとて七日を朝四とたより

研中のへい入まき丸も産物の中と小見が宿れよりその師小坂先生公席点誌に

右製法藥弘所並施療 江戸元留町中塚南側四万五を店向瀧澤氏精制製

取次所△大塚齋橋筋唐物町南入書林△内袋△江戸芝神明前書肆いり市兵衛

○招牌及報条能書必乾坤一草亭の印記あり此印かきハ偽劑と係

東都 曲亭主人編輯

栗津原の六出花 鎌倉山乃母子草

初輯第一

蓋世の勇もこのむべうらむと経邦の智も誇るふ足らむと項將のちんくふと

拔死威權西楚小覇くひも命運竟に究りそへ鳥江の水逝てゆくまむ

韓信が才漢祖を佐くその功四百餘年小掩へど傲慢上と凌だてて淮陰

の市暮て聚つむと彼ハ埃下の野戦に頸刎然此ハ未央の宮闕小戮せ

らゆ古を親く今とどくバ和漢その人又まうり抑征夷使の朝日將軍

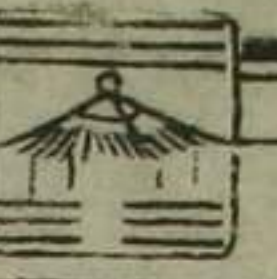
從四位下伊豫守源朝臣木曾義仲ハ古春宮帶刀長義賢朝臣の

嫡男ろりいぬる治承四年の夏四月高倉宮王の令旨小應して義兵を



朝夷巡嶋記全傳卷之一

曲 家 方 賣 劑 畧



信濃 小起せしより。同年の冬。戦ふ捷攻をとり。旗と華洛を推靡して平
 氏を西海へ逐走し。源家ヨリ年の誓懐を一時は開くの時。白河の
 仙院と且く守護する。勳績莫大なり。官爵輒父祖に超し。武の棟
 梁と仰れらる。功は誇り勇を憑く君を蔑りたり。非礼狼藉大なるは
 緯籛倉小治之。前武衛頼朝。臣朝敵義仲追罰の院宣を賜ふ。
 舎才範頼義経と追討使と定めり。数万の東軍前駐し。鬼道瀬田
 の上洛を時元暦元年正月廿日。義仲これと防んと。廷尉義廣四
 郎兼平以下の精兵を両隊小こけ。少選防戦あり。不慮の合戦その
 棧を喪ひ躬方は繞く軍兵る多し。果敢る。華洛を落されて木曾殿
 主後僅小七騎且戦ひ且まれとも。越路を抜く由れあり。此の因春の
 雁列を素く。後と立羽音小信と入こと。せむや。是首被首小元満る。

敵はあまの粟津る。森のほとり小末のひら瀬田の夕照は凍釋る。残雪の
 花花落葉後れ先づ。兼平本は彼此よく隔らば大將一騎あり。あつれ
 のま生とも何ゆせん。前面の芝生より立て。腹を切らん。只管小馬の足
 掻とともあつ。あひ入る日を背後小せ。こが教さる。薄氷の深田。馬を
 乗にう。拍どあま。ど。なるも出さ。ある便る。と夕間暗る。あつれ
 星月夜隕て石田。名久。護つ。前。額を項へ。撥四五寸。う。う。深。深。
 小雲時ゆ。場。を。抱。た。臥。の。義。仲。移。れ。の。ひ。ね。と。敵。の。軍。兵。四。馬。散。
 動。今。井。根。井。指。綿。織。大。絢。木。曾。殿。恩。顧。の。老。黨。義。小。の。取。り。ま。り。あ。
 維。一。人。の。存。命。べ。れ。箭。の。竭。大。刀。へ。折。る。や。う。く。奮。怒。空。戦。せ。る。あ。な。く。乱。
 軍。の中。小。勢。れ。多。り。そ。か。中。小。當。今。一。の。勇。婦。と。せ。え。一。鞠。繪。四。郎。兼。平。
 何。朝。臣。の。側。室。る。り。剛。者。る。と。北。國。數。度。の。戦。ひ。比。類。る。死。傷。死。

ちく。その名は都鄙に高きり死さざれば丁をおさこの日この時七騎
 るるもその柱は敵に殺散し。先へ進まふ木曾殿これこそとめ
 義仲が最期の軍小女人は先陣をさすりる。いつとんは朽惜るへ加
 梅休の去年より懐きて今ハそや目ゆめらんたり。ひとり虎口を殺脱とく
 とく為よと幾遍う身の暇をゆりどもの。鞘絵の一步も退き。只眞土黄泉
 のちん俱との回答ちうじく。群立ちる大軍へ会釈もあく突て。破拂大
 刀風吹く。優は草も血は浸さどく。おろぐ枕は五騎三騎殺れぬ敵のり
 けり。鞘絵かこの日の打扮は紫格子と織さる直垂小菊減をまけく。く
 崩黄威の肚甲ゆ袖つけく。三尺五寸の大刀と佩。廿四差する圓羽の征箭の
 射送り。谷台さる脊負つ。重藤の弓は追弦け。連続芦毛の駿馬は
 金覆輪の鞍ちた。澄長は弛哩とちり跨。丈はあままる黒髪は後へ

さるとちうらう。天巻と額に當白打出の笠仰及小著る。遠山の眉
 丹花の脣美目も容貌も萌圃く。亨年さるみ二十八現未曾有の勇婦を
 父のぬ小窓城。夫を佐く。冠と対する東海の烈女も形名が妻もいさで
 こ色ふちゆべたとく。頻は舌は振ふの。こ色とく。ひとり抽で大刀と合さる
 りのるを。敵食こ色ふ目をうけく。十重二十重は困さる。鞘絵ハ主の
 先途はゆあ。身は口一騎はかりゆけ。ど心やとく。焦燥て道つく敵を
 蹄ふけさせ。左は拂ひ。右は當り。を人郷は入る。又一條の血路を洞
 きく。後へさると馳出る。おそとてこれを逐ふ。のほ。浩如。遠。州。入
 氏内田三郎平季吉。主後三騎馬を死。透間の中。追
 詰とえ入り。物。や。との。障。響を引か。馳。ち。か。や。ぬ。く。先。人。達
 軍兵が體の総角。と合。目。上。さ。揚。く。矢。声。を。ぬ。る。入。礮。後。

進む軍兵が胸骨を打碎れ伏果て死にけり。主の内田はこれとて時
女が勇力多きなりとてこれゆゑ又坂東の力士とて眼前に二人
怒りて阿容とてくわらひてつゝ後陣に進む甲斐源太一條小次郎
ろんや這廝万夫不當の勇ありとの鬼神ゆゑもあはし二十人から
ありとて入も許せし季吉が日來の本事何時と期とて死目小物とせんと
澄と蹴立ち真一字よせあらせ名告れ名告る軍の古実三は知ると
うまの大刀を抜き前も射うけどあつち組んと遣らるる馬の尾背推る人
利腕とさう引組り。當下内田へ逃すや。鞘絵が黒髪ゆきやく。腰刀と抜
け。頸をぬんとさへけり。鞘絵の驕るうら微笑達死和主が拳動る軍の
敵よりゆゑのぞ嗚呼する死ねのせむもあはしとひんく美成振り固て内田が
臂と礮と打うくと思ふと指を固く。刀を肩と落せし。鞘絵は

うらと揮はれ死にけり。腕の伸く。兎の真甲しう流く。鞍の前輪小通著
つ。内兎よと入とて。七寸五分の腰刀と見くと抜き。推仰けく。細頭を
放發とぬれ射り。季吉既と射れ。敵のいやく近づくと。只八方より
射ぬる。箭小鞘絵の馬と射倒さして。主も醫居小控と落起んと。まろ
起し由立む。和田義盛ホをり累く。矢庭は雷状うけうけり。ける。籠
軍果く。和田小太郎義盛ホ廻侍。鞘絵とぬく。鎌倉へ陣せし。木林
五郎は領らと。刃切らるべし。とゆゑえふと。義盛殊よ。一を惜めて
哀れとるが命を助く。某は場か。あつちあつちと。中三持。中
鎌倉殿頼朝。中一の女流といふ。あつち。双る。剛のり。あつち
豫と。聞石と。その。その。木曾が股肱と。鳴れ。中三持。中
原兼遠が。女児。今井四郎兼平が。女。主の。側室。

恩顧勇敢有斯せば君父の仇を報んとぞのさるころよりさぞやうち
釋さるのんとも一切許容るるけりともあるはさるるが小栗宿衛義盛
今只管小彼女を乞やうとと別小仔細ゆらむと但枕席共ははく勇
子孫を取らんぬえいさでう僻事ゆらと辞を放ち身小くえて命乞と
老より一々鎌倉殿頼由今更小義盛が父祖三世の忠義よりひうえのて
竟小恩免ありさへ義盛大に教むと聽て鞠絵をこととらんおの宿
所へ侍ひたり却義盛盛のころをゆるる老女們と鞠絵を勤り耐心させ
自由又衣裳袂整つ改めと對面とさこのみなり私の宿恨のるさく敵と
るの躬方とあるさ武夫の程るさ今又は何とさいふべし某此度恩賞小
やうしとさく和女郎袂ぬゆるさるさ小愛香小恋ひとゆる縁小
結んとふあさむむけりさ夫婦小わたりて勇と子孫小送るのさおん

身も既君父の志小致しとるさ武夫の程るさ今又は何とさいふべし某此度恩賞小
と正首小相續の鞠絵の貌を更めとさくさでさるさと過世あやし死
因縁とさるさ忠臣の二君小仕と貞女のさう西夫小見えん生て操成
破んとり死とせ小恥るささとさのけとさばりゆらさるさく小人の情を
さるぬ小似たりとさるささのさるささのさるささのさるささのさるさ
あささささ率命とさるささのさるささのさるささのさるささのさるさ
老女們を退せその情由を問へと鞠絵の頻り小嗟嘆しとさるさ人の智者
勇士和も漢もさるさく小その子の親は劣りたりとさるささの父の氣城稟と母
小の背はとさるささのさるささのさるささのさるささのさるささのさるさ
兼引とさるさ加旗とさるさ腹小の木曾殿の亂を宿しとさるさ四小舟さるさるさ
勇とさるささるささるさ流石と惜と命とさるささ他また仇と任せとさるさ

この故へおん為素より嫡妻あり。又西個の子ともあり。義盛が嫡子と云ふは人の
 妬も難護。こゝに素より二つは有り。滅妻と憐れぬ妹はといふ名は
 あり。小夜の枕を共ふせは主君を子とす。子も二つは前と後。一は
 つらねんが仇とて仇とせし。女由節操を破る。恩義不替。又
 子夫婦血を分枕をる。る。飛馬く有り。子も二つは前と後。一は
 今。面り小刀小伏て刃を濡くする。外は形と有り。と。入る。同答
 志。義盛我感嘆。い。所道不稱。初念の思ひ。縁。鎌倉殿
 下。婦妻よせん。と。賜。和女郎。不。嫌。弱刀。称。門。又
 指。と。と。その胸。若。あ。と。国。門。の。内。を。あ。る。人。を。さ。す。その。號。を。う。り。ん
 妻。と。呼。ん。良。人。と。齊。眉。あ。う。う。その。子。ハ。源。氏。の。嫡。流。る。り。と。も。又。の。朝。臣。ハ。朝。敵。入
 明。地。火。披。露。あ。う。と。義。盛。が。子。と。せん。と。固。より。望。む。所。也。易。く。あ。り。ひ

多くと懇小諾ひ。一。が。鞆。後。ハ。感。涙。拭。ひ。あ。く。む。多。ひ。小。女。ハ。義。盛。が。使。と。す。り。ひ。小
 や。安。堵。と。思。より。あ。う。小。二。聲。の。室。中。ハ。隔。る。る。さ。あ。り。あ。う。妻。と
 ぬ。れ。く。日。を。送。り。ぬ。却。説。春。暮。夏。更。と。く。その。七。月。の。中。院。有。一。日。鞆。後。ハ。産。の
 け。つ。て。男。子。誕生。と。り。く。義。盛。珠。又。飲。む。あ。ハ。こ。が。家。の。三。郎。が。今
 朝。由。歩。日。と。も。小。初。声。を。揚。り。た。と。百。二。三。朝。日。将。軍。の。胤。ち。り。り。一。代
 頭。の。の。軟。と。と。え。と。多。人。バ。そ。が。あ。う。小。阿。三。丸。と。名。つ。け。一。が。月。比。此。子。け。し。ふ。
 且。人。又。あ。う。せ。び。こ。の。年。冬。由。あ。う。は。あ。り。て。三。男。と。産。せ。一。と。親。族。朋
 友。又。吉。あ。う。せ。五。十。日。百。日。の。祝。死。酒。宴。一。と。拵。び。一。が。疎。れ。入。さ。う。親。ま
 り。の。由。件。の。赤。子。と。毛。仲。の。遺。腹。子。と。誰。も。あ。う。只。義。盛。が。の。ち。や。産
 せ。一。と。の。と。あ。ひ。り。さ。る。は。阿。三。丸。ハ。質。弱。又。病。の。あ。う。も。あ。う。夜。小。日。は
 う。ち。腹。の。ふ。く。三。才。は。あ。う。あ。う。あ。う。あ。う。一。室。の。内。ハ。こ。の。由。道

あらくと成せざとて人會傷しくもひく。啞子やあやふん。覺ゆやたつらん。
 生さる憑一くもとて。指し笑ふのさへあれは義盛のいとく。あつらん。
 多るばかりのぐら。愛まるところるうりけり。現るひ内ふある。人の気色の倭ド
 くて。朝絵の西月ふ立霧のさる月日の形方う。又うち歎く。又ぐと小乳母
 葉もも賺くひてや。阿三九がゆといと。むつくる声のまてけい。ててゆも
 てた。子うの渠中ふ。母の形。おびあふとまてまや。こひるころのこひ
 ぐひるまじと。ゆたてえんとあふお。義盛の女童く。朝絵をゆてあま
 てる。二室の内へ招たよせ。ゆたてえん。く。遍り。嘆息。く。ててゆも。藤
 よりあひふまじと。急ぐべた。とゆもあふ。と備の人。はあえん。が。使あく。く。あ
 まど。然止。と。と。つくと。阿三九が生。た。推量。は。武士。あ。る。べ。死
 め。ふ。あ。ら。と。御子の生。と。る。が。う。ふ。く。奮振の勢。ひ。あり。蛇。ち。一。寸。ふ。く。

その乳頭。頭。は。そ。と。あ。ら。う。ぐ。の。見。は。三。才。あ。る。る。あ。ぐ。一。歩。も。運。び。動。は。と。我
 せ。と。あ。の。ふ。と。ま。と。う。叶。り。後。は。恙。る。く。生。ま。月。も。在。弱。不。具。の。人。ふ。て。を。た。う。ら。あ。
 勇士の子。ゆ。鳴。呼。る。る。の。良。将。名。士。の。種。る。と。い。ふ。人。の。あ。り。の。ゆ。め。れ。と。
 かくま。で。親。ゆ。肖。る。る。の。あ。ら。う。ひ。る。た。ふ。も。限。り。あり。と。ま。て。と。れ。あ。ら。
 見。を。法。師。と。せ。んと。あ。ら。は。一。子。出。家。さ。る。と。た。九。族。天。堂。と。生。る。と。の。あ。ら。う。
 親の菩提。根。を。吊。ぶ。べ。ら。自。由。亦。過。世。の。惡。報。を。滅。却。さ。る。小。使。あり。就。て。二。の
 戒。刀。と。し。て。使。う。あ。ら。う。と。れ。は。是。源。家。の。先。祖。多。田。新。渡。意。道。の。遺。物。也。
 佐。敷。朝。相。傳。志。多。ひ。治。義。四。年。の。役。ゆ。が。祖。父。三。浦。公。義。明。老。命。と。擲。く。
 忠。義。を。泉。下。と。竭。く。則。没。後。の。勸。賞。は。義。盛。と。賜。り。た。と。こ。ん。あ。ら。と。後。
 ぞ。ろ。の。ち。う。鐙。ま。の。いと。愛。ま。く。不。動。之。磨。邪。の。形。状。俱。利。迦。羅。龍。と。鑄。は。し。た。れ。は。
 俱。利。迦。羅。丸。と。名。け。多。ひ。ら。あ。ら。う。と。家。は。又。有。ぐ。た。宝。と。い。と。も。親。と。

俱利伽羅の
戒刀暗く
母子を懐き

月夜に福来り



為家卿

かき木あは
たのきれ斧の
柄をとるよ
かりむさくまぬ
せしそつかけ終

どりえ



朝市に福来り

甲の文盤

ふさ丸

皇別うろ。ちん又君小くそ及び。和田へ桓武の後胤をば。ちん才が養ひ人と養ひ
 とも。ちん才が養ひ人と養ひ。法師ふせよとのめめめ。法師ふせよとのめめめ。
 そと成恨もこれ死ん。ちん才が共ふとのめめめ。法師ふせよとのめめめ。
 たる彼丁そ木曾が落胤よ。母の鞠絵が縁は連く。美盛が子ぬるし。と実又
 の悪業報ひすも。おもひのいさむ足も。愛を養ひ又失ひの世も。人あも
 疎も。法師よりぬと。仇なく。指し笑る人の口小戸は。ちん才が四阿乃
 間屋の廂と住棄る。才とちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 君の名を降さん。朽をちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 るハ化野の草の原さる主親よ。ひとくちも。衣才の幅陵死世。ちん才が
 うふ。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 つける帯の曲結び。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。

火のあはとら。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 声丁を立松音小泣く。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 の玉白小碎る。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 門は。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 往夏へ悔て及び。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 と念う。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 さんとさる。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 蹴む。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 とさると。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。
 たる生死の。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。ちん才が。

抱き締ぢまりたよとはら幼主をと横はて衣領をもろけば乳は推りとも啜ぶとやがて
 敲を著る乳母も共に声を吞て泣り外へまる去りはら朝絵はらるおれ度
 洩りやせんと亮隔を引よせとや葉の縁故成告ぎと駭れのせん白月も
 泣きん林の成憎しとなねど親とく子を殺す何れ苟且のみやらんや
 明地めらひうたらんとさうさのもあいまぎく益るたとのまぶその子を
 措て疾退す連係せとまく後悔をといひら刀をとり直しおあゆ成
 よせと身を指小背向よるりて声をぬかし情由をゆから禁る欲と
 思ふさらさもありらん和子の入り支起りくあらの殿の仰せらるゆも
 和君が心とりごらあら緯の顛末不意彼れ又空藕はたりぬれぬあらう悞く
 やらませぬ必死と多し決めぬ理り逼てらるく小林の成嗚呼と思ふらべ
 さらさらるる傍らの側視八目黒白も別ぬこららぬと縁あらとこと襪襪

とり乳母小ありとと三年その長といは主後へ滅と推せ恩愛の奴とらりて
 且昔昔は昔の珠翳の花塵さとえは手和子の必死を外へ又と連係され
 そと宜しとるを憾る也和子の虚弱まをせり支行ゆおのと世の俵子とり
 晩苗ゆけりおとく人のいまで生涯ちとらんや物こられの誣言を悉され
 おひら大刀袷あらひらびらとも出家成嫁らせるひらぶと預けある舊
 里へお供く連男子ははらん田舎の壤は足踏固めて牛ゆも突きは馬
 めも躑との穴肥て骨逞く徒男もるりぬとゆえらぬ殿へ悔し思ふてる以
 さらさらるるこらんこらん良人の安房國朝夷郡ちる大崎浅江の豊入あら豊三
 六とゆきゆりいと會々らゆきとも人のあら骨を折心を入まく思ふせばいと
 憑きまきのるぐら過世とらて病がひ一年あまりらち小の秋乃調と讀ら
 さらさらるるせんさらるるららららその夏奉一女と親あらびとらいののよ

上怒の人は養をせしむる遠く乳を售てこの鎌倉へ来りあはれて良人の
 病著平愈なり。今も母を養ふにや。をりく音耗たりしに於て母の前の其ま
 安房へ赴き多し波風騒ぐ世とく。港口の出船日ふあり。峯北嵐のちりさ
 と。枯る木の花開く。力のるる果と。いそぐ。後の栄と。待たねむ。はと
 聴き。び。惜けくも。ありぬ命あり。和子。り。ろ。た。ふ。死。む。と。あ。り。外。は。ら。む。と
 口。説。つ。は。り。引。提。り。刃。小。背。つ。れ。た。り。誠。忠。心。を。願。れ。く。日。来。ふ。他。げ。る。は。練
 言。小。慚。く。鞘。冷。ハ。ら。び。も。落。き。涙。と。り。ろ。た。ふ。合。ひ。る。刃。と。真。理。と。棄。て。その。身。も
 其。如。小。磯。と。坐。し。葉。ひ。微。妙。い。ひ。つ。る。乳。母。ハ。親。又。異。る。る。念。愛。小。絆。され。て
 刃。の。下。は。刃。と。厝。る。憑。し。との。も。あ。り。あり。況。や。これ。ハ。その。子。の。母。憎。し。と。く
 鬼。と。ち。く。正。る。は。奉。動。や。ま。た。は。焼。野。の。雉。夜。の。鶴。凡。生。と。活。る。物。子。と。あ。ら。ぬ
 る。死。せ。る。小。母。が。も。づ。り。子。と。殺。さ。せ。り。も。人。の。道。る。は。と。も。ら。ざる。の。ち

唇と。嚙。し。て。穢。り。る。穢。ら。穢。と。武。夫。の。家。や。生。れ。習。浴。え。親。子。の。元。所。容。と。
 法師。み。る。が。後。この。穢。の。只。今。丸。と。殺。ま。悲。し。み。あ。ら。ん。と。これ。の。よ。り。法
 老。と。れ。る。そ。ろ。と。小。置。む。づ。も。あ。ら。ま。定。ま。その。子。ハ。和。田。殿。の。胤。ろ。う。祐。と。も。養
 育。の。恩。養。ハ。実。子。小。異。る。る。と。不便。の。り。小。志。あ。ひ。し。る。日。来。あ。の。他。む。と。ひ。し。け
 わ。く。法師。み。せ。よ。と。い。れ。れ。この。戒。刀。と。あ。り。し。さ。ら。つ。く。推。量。れ。ハ。あ。ま
 り。ひ。も。る。は。魔。人。と。久。後。さ。も。憑。し。ま。ば。殺。し。穢。を。賽。し。の。謎。わ。る。べ。し。と
 必。ひ。一。ハ。眞。土。の。首。途。母。も。子。も。あ。る。道。小。と。突。つ。し。刀。の。あ。ら。の。牽。出。物
 截。味。ハ。ち。と。試。さ。ね。と。十。騎。萬。騎。の。敵。軍。と。破。靡。る。大。刀。風。も。子。は。名。と
 風。々。奈。麻。余。と。う。甲。斐。と。う。と。う。の。こ。は。林。市。と。れ。練。と。と。今。こ。こ。に。あ。ら。ん
 以。せ。が。解。る。が。状。それ。ろ。あ。ら。ぬ。う。糲。の。こ。と。と。か。死。難。頭。ハ。心。の。ま。つ。ら。い
 足。ら。ざ。り。し。言。ま。ふ。は。伸。も。竭。さ。し。苦。し。死。肉。を。精。せ。よ。と。い。ふ。且。く。沈。吟。し

既よき丸なるゆの第一なる養親の記念に田湍仲の遺物とて源家
 のある宝刀なるをその説く其邪み等しく王と截鐵を辟くことむり
 彼を試さば行成りくその能とある今面りふらるること子
 子に備は
 まげまといひつ刃ととりて腹へさすと突さればこれいと騒ぐ葉子と
 ある音と推禁やく深痕は屈せぬ息と吻死まむ死時死む死
 するふの恥ありといふへ人の金とま言の紫をひあけり。これのく
 勇もたつ名もるくハ初やむ小恥く死のせさるべ栗津乃原の敗軍に
 勢竭く生物と君が黄泉の俱ふるまむ仇なる人よ才と寓と形る死世
 形る死子のゆゑの闇め迷う煩悩の犬小送られ月日荒まらぬ南柯の夢さめて
 知る二十年の非威や三教具足の智識こそこの俱利迦羅の戒刀るれ和田殿
 とれをあらうま丸と激とよもるる。阿容と存命と激と醒と恥と

累後かひはうや美盛ぬ親子が命城とんとく。むれとる大刀るはとも
 今とむゆも鮮らばく阿三丸と落遣らば。日直只思美小負く。その
 子が人となるえむ。こむらゆのより成徳よじ幸ゆ。く羨るく人。むらむ小才
 長く親の智勇と宗嗣とも。木曾殿の落胤とて謙倉殿小弓とや養父連
 係とる。あふ考ゆもあふむ。却父祖の名と汚さん。只つちさむ。衣盛
 ぬ。試実の父とむひとり。その方の武勇世小ゆえ。召さる。時あむ。おれが
 勇と養父と。忠孝節義を宗と。親は仕君。は仕功成。名遂。身退け。
 邦への後小木曾殿の落胤と入。はる。とも終く。世小恥。取。る。ひ。ま。言。の
 紫草敏く。へ。傳。へ。あ。や。ま。ら。る。ん。こ。ま。ど。滅。母。肝。膽。こ。の。外。の。人。も。
 邦への。葉子と。まむ。記憶と。告ぐ。侍と。入。教。ぐ。海。へ。入。る。を。
 木曾殿美盛ぬ。その。良。人。豊。六。と。や。ん。一。身。ゆ。て。三。個。の。人。あり。二。

歳少くも月の厩とさるる。且て我幸とすべし。我又只不幸といふ。我
 塞公我が馬我現ふ。我もさるる。今や我志る。あつねて我周徳しく時を
 後し。人志る。我出る。折もよく黄昏る。背門の草木の鎖を
 間ふ。起ぬの准体とせむや。ともしそが声と吻息を流さ下。無漬る鮮血を
 浸さ衣の多。杖の裾野と深るせり。葉木は毎は辱さ上。良。このや。か
 る。袖の雨。おふ。ゆる。和子のう。こが。灵。命。ゆ。ゆ。と。て。字。を。入。さ。さ
 さ。さ。さ。年。と。経。く。物。の。こ。ろ。の。つ。た。ぬ。る。世。の。真。意。の。ハ。天。離。る。鄙。の。住
 居。の。こ。び。さ。ふ。る。海。形。る。た。み。の。虫。の。父。恋。し。て。く。る。た。ぬ。る。況。や。林。が。先。さ。ち
 多。ち。ぞ。の。落。成。仰。た。て。木。晚。成。お。け。濡。る。露。は。秋。の。朽。ぬ。し。水。は。冷。か
 後。お。さ。尼。と。る。り。て。も。存。命。と。科。戸。の。風。の。を。り。く。お。使。り。成。成。せ。て。さ。ら。が。ば
 よ。は。悲。しく。辱。く。憂。を。慰。む。よ。ま。か。と。も。わ。ら。う。ま。う。の。を。構。纏。の。た。が。ま

別。我。假。寐。の。夢。ゆ。も。ま。と。と。と。と。今。ぞ。一。世。の。辞。別。や。母。前。の。臨。終。お
 是。の。た。ま。や。是。の。人。と。心。起。し。て。も。現。る。再。寐。せ。ば。推。見。と。抱。れ。揚。る。も。力。る。く
 朝。給。が。ほ。と。り。へ。さ。う。ま。れ。ハ。引。著。て。目。を。睜。け。賢。愚。の。差。あり。とい。ふ。も
 形。貌。ハ。父。と。母。又。直。示。子。と。う。と。親。又。背。さ。る。の。の。病。病。の。致。さ。と。さ。ら。わ。ら。ん
 け。下。の。し。こ。が。魂。影。躬。ふ。そ。う。く。カ。を。戮。し。武。勇。智。叡。の。実。父。の。こ。と。志。氣。の
 養。父。の。如。く。替。力。ハ。母。又。十。倍。せ。は。社。士。と。さ。さ。で。や。ハ。巴。ん。志。う。ま。と。て。朝。給。が
 自殺。又。お。ひ。え。う。と。和。田。殿。留。め。る。ふ。と。も。そ。が。ま。あ。う。と。り。て。久。後。却。ひ。り。て
 る。一旦。艱。苦。の。待。衢。又。走。り。く。その。助。骨。を。固。せ。ば。見。ぬ。男。士。と。さ。り。て。は
 さ。い。ふ。人。の。常。言。小。三。と。び。骨。を。折。く。後。良。医。と。あ。る。と。い。ふ。こ。の。あり。その。白
 絹。ハ。実。父。の。像。見。こ。の。戒。刀。ハ。養。父。の。記念。而。る。が。血。が。流。る。母。の。記念。ハ。こ。の。こ
 ち。ふ。と。傷。口。ふ。み。試。さ。う。と。く。五。臟。を。疔。引。出。と。隻。子。小。子。を。推。仰。け。て

こら子へ汝乳母の分際ゆく。理るく俱く逐電せ。是則盜賊なり。その勇ふ
崇るるらんや。彼推とあふと敦圍へ唯と懸て婢們群こし。ままの引戻さんと
さる後。室内俄頃。陰と吹入る。風毛骨を堅て障子。亮漏鳴る。こめ死
まの。鬼んとせ。婢們へ。こら。あつで。踏と引入。さ。さ。さ。さ。共。共。共。
居。小。控。と。轉。輾。の。羨。盛。ま。ま。く。焦。燥。く。燭。撥。遣。り。衝。と。寄。て。挿。ん。と。さ。
腕。癱。麻。く。さ。さ。の。雲。或。翹。ぐ。忙。然。ら。る。その。隙。又。葉。の。背。る。阿。三。
丸。と。又。揺。揚。て。閃。り。と。下。る。縁。敷。より。庭。の。木。立。を。潜。脱。く。颯。と。推。り。く。片
折。戸。出。と。前。面。う。う。の。鎖。ぬ。間。ふ。と。去。去。ぬ。

初輯第二 月夜乃竊立鳥 鷄鳴の野面船

却脱乳母葉の阿三丸を脊負つ。月と燭のくま。る。宿。小。腹。裡。と。お。の。め。
く。て。め。め。と。あ。と。り。て。あ。さ。さ。る。脊。負。つ。月。と。燭。の。く。ま。る。宿。小。腹。裡。と。お。の。め。

や。稲。村。小。壺。の。濱。辺。と。ゆ。安。房。上。懸。へ。こ。こ。の。秘。毎。日。あり。と。豫。と。ゆ。ゆ。と。も。
彼。知。へ。下。り。近。く。若。昔。月。枕。る。る。猪。あ。む。む。君。所。の。人。追。蒐。来。り。引。續。
され。る。が。や。お。る。れ。あ。る。金。澤。わ。る。野。嶋。へ。い。ゆ。る。追。め。あり。と。も。こ。ら。ら。ゆ。
つ。て。輒。く。前。面。へ。と。び。と。忽。地。は。尋。思。ん。東。と。投。く。喘。足。信。し。て。
ま。る。の。う。ら。背。小。兒。を。載。こ。む。い。と。ま。く。疲。勞。果。て。歩。の。運。果。敢。と。ま。
さ。干。し。く。子。二。の。ア。の。件。の。海。辺。は。来。ま。ま。と。真。夜。中。の。ま。が。船。と。お。さ。は。
一。碗。の。白。湯。へ。と。も。を。む。と。お。ひ。い。浦。の。台。屋。の。戸。を。敲。く。ふ。と。く。く。く。
息。せ。び。只。射。の。声。出。る。り。せん。ま。ま。と。破。馴。し。松。葉。今。宵。の。あ。る。と。と。ま。あ。て。
か。さ。の。ま。枝。又。夜。露。成。御。せ。や。が。て。株。と。尻。と。け。て。ま。ふ。ち。か。り。て。阿。三。丸。を。背。より。
搔。お。は。し。月。の。光。と。と。ん。か。う。ん。ま。ま。と。睡。る。か。如。く。死。せ。る。か。如。く。揺。晃。し。て。も。活。で。や。
息。せ。び。動。を。も。せ。び。白。月。映。ま。と。る。く。ふ。樹。の。汀。渚。と。る。泡。と。共。小。消。へ。



野の
嶋か
崎
あさ
三
丸
又
ち
酔
ち
を



まゝく逢へ世話よふさう縁多か乳のへ馬士秘びこのむとの
 せび水の中へ入るに刺截おろしのか入るに刺著草被てふぐくおせん和子の處
 よく縛をさく受ふと聞たり豫く先刻の葉をひるさくは逃もせびある
 亦鞠絵清舟の送言重かるたこの身はあつと命おけて郎君とさうさく
 預りたる女子ひとり大勢と引立直ぐと鳴呼るさくやとのいせと
 あくど獣六の眼尻睨り足踏鳴びささほふさう舌長彼縛よと敷圍の
 うけ多ると野兵とも衝とあせあめく稚児と奪集ひととと葉の懐へひと
 突へく引出まはるるの避とさくとして携れば突退躊躇らるる改唇ハ奈と衣
 破れ轉輾どもるほ放さび挑争ひ泣叫ぶ声又引とく一團の遊魂西より
 閃た来る糾まるが如死阿三丸が旬月のほとりへ礮と落て懐へるとぞえん

不思議るるる息後し阿三丸忽地甦生とく血気力量ヨ病るる三歳乃小
 児は葉の抱きるる左右の巻は働し腫と掛る兵士お成撥退さくさ
 ろくさく撞と投著まふの既届ぬ野兵とて小隨て助斗し起てハ鈴鐸
 携るる浪び象棋倒の流足終ゆら立ゆるさうけるさく奇持小葉のさく
 驚き且おびここと正しく母清舟の魂魄和子と衛りぬさく枯木は
 花を閉く朽る條も實は結ぶ現有るさく靈驗奇持るほ久後を衛らせ
 多入能くやと男と立前面小呆る獸六の武者戦と刀鞘小く掛骨唾子と
 のいさる小児は他げられた力量早技願ふは實の阿三丸るは推量とさく
 是能見坂の野瓶るさく侍後川の氷虎るさくことさく眉毛も小唾と引り抗
 鼻禪とも固く荒の油京強るさくを准估せの尻の戸鎖の堅固えおれや組ん
 と堂を二三四うち鼓じ左右の膝もひ蹴りけり力足と踏蹴まじ向んとまる

程小つらむ沙磧小けいぬぐ尻居小撞と轉輾ひ吐嗟と叫び腰と掛面を
 撃つて刃と起一あふ足場ごとくけき高ひの堂ひも水の漏る況や汝が顔の
 血うち砕く于海とるさる生拘んといと易く其知る退そと沙うち拵ひ刀
 の目打と舌のく濕く又懲むさ小立向へハ三九倍と疾視てぞれ獸六
 無礼母の自殺のこまをちりふ今又父の使戎阻く不孝と醜まべうもあふ
 終どことよメ病の衣破りて早晚又愛を失ひ一旦劫を成受る可呼はる
 召せあふとて一切とる立びまたりあつりもまて却親のめん過失を
 世小廣うまるめ小似たり乳母夫婦親と憑る老がく苦中の苦味喫し
 人の中なる人と成り或まの数も入るんと死は再會と許させあつらん過
 失人あもあふせむ母小不孝の罪科成贖ふよまるとるうぬべい今仰ふ
 隨が死ん亡母の志延父のめんあふるり罪あつりくことこのよと口つら

よくあふせといつれて腰越獸六のまひく呆まて舌と吐死三才あふぐあ
 ぬらぬり九どのが棄るる辨舌あるるにまの只物がいつたる放怪物より
 とそおとぬらむ後難道且くあふべいとあふへとも鞍兵ホハ既又怒腹で傷
 一ぬまむ勅令これむとり毛と吹疵と求んよりまりのりてあふえあけ加勢と
 きて復来るん正るる敵は背とんせと逃えくんとあふめぬれ小續け
 と逸足知く跡とめんきてままるぬそ一塊は倒れける鞍兵ホこれと受
 一町あふり先くあふる獸六と信とえく或のひ抵抗扇をむら死洲崎金澤の
 入江と遠りる鎌倉のうへ落るあれこの隊の頭人腰越氏獸六郎とるる小僻
 目欽誘りろ共小入りるん拵つけあふとゆりてむかくたふと味鴨の轍か
 如く逃亡るこの時既天の明つ各屋の門成開るうら件のを体を元捕入

吉田屋

舟のりて船を借入といふ後の崇ハもそはくまど浦ハ舟の既又まゝの舟の舟を
 房まで船を借入といふ後の崇ハもそはくまど浦ハ舟の既又まゝの舟の舟を
 吉と巻て凡入るはとどひくまど浦ハ舟の既又まゝの舟の舟を
 歎待して早飯我勸る程は船の舟を建管城より入江に准備をやくも整へ舟
 人ホのひびく主後我杖乗せて帆と揚楫と操つ野島が埜沼漕出さふ今船も
 順風より波上平はて船の走るといと速う。さる程又阿三九八追捕の兵數六ホ
 逃入り後ハ悍く勇るる多うて只尋常の小兒の如く船中ハ松び致さ尋みる
 記應せまがが如。さる程又阿三九八追捕の兵數六ホ
 彼成多不可思議なる比自靈魂の冥助ふよは久後いやく變りて感涙を
 棧めは只彼君の菩提と後して向々死安房へ舟の来るまで仏名してぞわたりける。

朝夷巡嶋記 全傳卷之一終

